

# カラダ目当て

## 第1章 でたらめな取引

「君に私の子どもを産んでほしい」

目の前にいる上司が、突然何を言い出したのか、牧原咲子には理解できなかった。

思わず目の前に立つ男の顔をまじまじと凝視する。

——今日も本当に素敵ですね——

そんな場違いなことを考えるくらい、上司の発言は、咲子にとってあり得ないものだった。誓ってもいいが、咲子とこの上司の間に、今の発言が出てくるような関係は一切ない。ただの上司と部下。それ以上でも、それ以下でもなかった。

つい数分前に、明日の仕事の打ち合わせを簡単にして、今日の仕事を終わるところだったのだ。本当に意味がわからなすぎて、咲子は啞然としたまま上司の端整な顔を見上げることしかできなかった。

これが愛の告白だとは思えなかった。何故なら、目の前の上司の顔に、そんな甘やかな雰囲気は欠片も漂っていないからだ。

——この表情はよく知っている。難しい取引やプロジェクトに挑むときの顔だ。この五年、彼の秘書として傍で見続けていた表情だけに、見間違えようもない。

だからこそわからない。この上司が何故、こんな顔でこんなことを言い出したのか。

咲子の上司——遠田明彦とくだあきひこは今年三十六歳になるやり手の青年実業家だ。全国規模のホテルチェーンのオーナー一族として生まれ、この不景気でも業績を落とすことなく伸ばし続けている手腕は、経済界でも高く評価されている。

ややきつめの印象のある切れ長の瞳。形のよい高い鼻梁びりょうに薄い唇、意志の強さを表す眉。疑いようもない本物の美形だ。

緩やかに前髪を後ろになでつけ、眼鏡をかける姿は、大人の男の落ち着きと迫力を醸し出していた。黙って立っているだけで、女の方が放っておかないような魅力を持っている。実際、彼が非常にモテることを咲子は知っていた。

わざわざ平凡で地味な容姿の秘書に『子どもを産んでほしい』と言い出す必要はないはずだ。

——病院の手配をした方がいいかしら？ 顔色は悪くないけど、熱でも出して、誰かと私を間違えている？

「牧原君。黙っていないで、何か言ってくれないか？」

焦れたように答えを促す遠田の声に、咲子は我に返った。冷静沈着な彼女にしては珍しいことに、本当に珍しいことに、遠田の発言にパニックになりかけていた。

——落ち着け咲子。最近忙しかったし、きつと疲れているのだ。だから、何か別の言葉を聞き聞

違えた可能性もある。

咲子は一つ大きく息を吐き出した。そのときになって、自分が息を止めていたことに気付く。

「……申し訳ありません。社長。先ほどのお言葉をもう一度仰おっしゃってくださいますか？ 少し疲れしているのか、おかしな聞き間違えをしてみましたようなので……」

その言葉に、遠田の瞳が眇すかめられた。

「君に私の子どもを産んでほしいと言った」

一言、一言、区切るように告げられた言葉の衝撃に、手にしていたシステム手帳が滑り落ちた。

「あっ！」

床に手帳の中身をぶちまけてしまつて、咲子は声を上げると咄嗟とつさに屈かがんで中身をかき集める。

「大丈夫か？」

「大丈夫です！」

一緒に屈み込んで中身を拾ってくれようとする遠田を押しとどめ、早急に拾い集めた中身を、整理もせずに手帳かかに挟み込む。

——ああ！ もう！ こんな取り乱すなんて初めてよ！

自分の失態を心の中で罵ののしりながら、急いで立ち上がつて顔を上げる。すると、眉間に皺しわを寄せた遠田と目が合った。その眼差しの真剣さに、咲子はびくりと震える。

——本当に、さっきから何が起きているの？

「それで？ 返事を聞かせてもらうことはできるだろうか？」

——返事？ あのバカげた提案についての？ できるわけないでしょう!!

内心でパニックを起こしているものの、咲子の表情はいたって冷静だった。動揺すればするほど、咲子は表情が能面のように固まってしまふのだ。それを周囲が勝手に冷静沈着だと評価してくれているのだが、今は関係ないだろう。

「その前に、一つお伺いしたいのですがよろしいでしょうか？」

必死に冷静になれと言いつつ聞かせながら、咲子はこの異常事態の打開を図ろうと試みる。

「何だ？」

「今日の体調は？ 顔色は悪くないですが、熱っぽいとか体がだるいとかそういった症状はありませんか？ 最近、かなり過密スケジュールだったので、お疲れとは思いますが……必要であれば病院の手配をいたします。明日からのスケジュールについて、診察の結果次第で調整しましょう」  
立て板に水のように話し出した咲子に、遠田の眉間の皺がぐっと深くなる。

「私は疲れてもいなければ、体調が悪いわけでもない！ いたって健康で正気だ！」

何を疑われているのか理解したのか、遠田が吠えるようにそう言った。興奮に赤く染まった端整な顔を見上げて、今度は咲子の眉間に深い皺が寄る。

——だったら！ この異常事態は一体何なのだ!?

波立つ心を落ち着けたくて、咲子はゆっくりと深呼吸をする。

「体調不良による錯乱でなければ、先ほどの発言は一体どういうつもりなんです？ セクハラ、もしくはパワハラですか？」

——真面目一辺倒の、この堅物上司が？

自分で言って、内心で首を傾げた。それが表情にも出ていたのか、険しかった遠田の表情が緩む。「君のそういう冷静なところが私は気に入ってるよ。だからこそ、君にこの話を受けて欲しい。セクハラのもうもパワハラのもうもないが、そう受け取らせてしまったのならすまない」

上機嫌で微笑む上司の顔に、咲子の戸惑いはひどくなる。

——ますます意味がわからないわ。今日の社長は絶対におかしい。

顔は同じでも、中身はまったくの別人だと言われた方がまだ納得できそうだった。

咲子は手で額を覆うと、鈍く痛みだしたこめかみを揉む。

「社長」

「何だ？」

咲子の呼びかけに、遠田が期待するように瞳を輝かせた。

目線だけでちらりと遠田の様子を窺った咲子は、彼の反応に内心でため息を吐き出す。

——悪い夢なら、早く覚めてちょうだい。

そう思うが、鈍く痛む頭が、これは現実だと咲子に教えてくれた。

「このままこの話を続けるつもりなら、座ってもよろしいですか？ とても立ち話で済みますような話とは思えないんですが……」

「ああ！ そうだな！ すまない。気が利かなくて！ どうぞ座ってくれ！」

照れたように耳染を染めた遠田が、社長室にある応接ソファを手で示した。いつにない上司の反

応に、咲子は何か見てはいけないものを見たような気分おそひに陥おとつた。

「失礼します」

咲子は遠慮なくソファに座った。その途端に、どつと疲労が押し寄せてくる。

——今日は早く帰って、ゆっくりとお風呂に入るつもりだったのに……

内心で嘆息して、咲子は自分の手帳を応接テーブルに置いた。また手帳の中身を床にぶちまけるなんて失態は御免ごめんだ。

「やはり牧原君は冷静だな。私が見込んだだけのことはある」

正面のソファに座り、にこにこ上機嫌に笑う上司を、咲子は胡乱うろたな眼差しで見つめる。

「これがセクハラや、パワハラでないと仰おっしゃるなら、私にもわかるように説明していただけますか？」

「もちろんそのつもりだ。話を聞いてくれてありがとう」

穏やかに微笑んで礼を言う遠田に、咲子は怪訝けげんそうに眉をひそめる。そんな咲子の反応に、遠田が苦笑した。

「君が冷静で私はとても助かっているよ。普通の女性にあんなことを言ったら、プロポーズか愛の告白だと思われる、話にならなかつただろうしな。もしくはセクハラと思われる、訴えられていたかもしれない。けれど牧原君は、とりあえず冷静に私の話を聞いてくれようとしている。それだけで、今の私は君を選んで正解だつたと思える」

——やっぱり違つたか。そりゃそうだ。

真つ先に愛の告白を否定されたことに納得して安堵する反面、何故か咲子の胸が鈍い痛みを訴

えた。

——何で私が傷付かなきゃいけないのよ!?

自分の心の動きに驚いて、咲子は思わず顔を顰しかめた。

「あまりに突拍子とつぱしもないことを言われたので、驚きすぎてどう反応すればいいかわからないだけです」

自分でもびつくりするくらい冷たい声が、唇から滑り落ちた。

「そ、そうか。それはすまない」

咲子の声音と表情に、遠田が笑みを引きつらせた。これが八つ当たりなのはわかつているが、フオローする気にはならなかつた。

「それで、先ほどの発言は一体どういうことか、きちんと説明していただけますか？」

再度、促うながせば遠田は大きく息を吐き出した。そして遠くを見るような眼差しで話し始める。

「私は今年で三十七歳になる。それで近頃、これからの自分の仕事や人生設計を考えることが多くなつたんだ。自分がこの先どうしたいかと考えたときに、私は後継者が欲しいと思つた。祖父が起こして、父と私がここまで成長させたうちのグループを引き継いでくれる人間が欲しい。そうして、できればそれは自分の血を引いた子どもであつて欲しいと思つたんだ」

「そうですか」

仕事が順調に進み、先のことを考えたときに後継者が欲しくなる理屈も、それが自分の子であつてほしいと思う理由もわかる。

——この人、何気に子ども好きだしな。

ホテルに来るお客様のお子さんや、親族や社員の子どもなどを、彼がよく構っているのを咲子は知っていた。

現実的な話として、周囲の人間たちも彼に結婚と後継者を望んでいる。見合い話はそれこそ星の数ほど押し寄せてきているのだ。

彼が一言『結婚したい』『子どもが欲しい』と言えば、彼の花嫁候補や子どもの母親候補が、百人単位で列をなすだろうし、世話を焼きたがる人間も大勢いる。

「不審に思っている顔だな」

「ええ。その話のどこに自分が絡んでくるのかさっぱりわかりません。社長が望めば、明日にでも社長と結婚したい、若く健康な女性のリストアップが可能ですが？」

「それではだめなんだ。私が一度、結婚に失敗しているのは知っているだろう？」

「ええ」

遠田は若い頃に政略結婚をした。咲子が遠田の秘書になる前のことで、詳しいことはよく知らないが、その結婚があまり幸せでなかったことは噂で聞いていた。最後はかなりの泥沼だったらしいことも。

「正直、もう結婚はこりこりなんだ。子どもは欲しいが、妻となる女性は望んでない」

「なるほど。ですが、これから先、社長にとって唯一無二の運命の人が現れるかもしれませんよ？あなたの支えになって、一緒に子どもを産み育てたいと思うような女性が。早まる必要はないと思

いますか？」

「確かにその可能性も考えた。だが、先ほども言ったように、私は今年で三十七歳になる。今から運命の女性を探して、出会って、恋愛して、結婚する。それからの子作りでは時間がかかりすぎる！何年かかるかもわからない！何より私は、女性を見る目がない！」

——あー、一応は自覚があったのね。

きっぱり断言した遠田に、咲子は思わず生ぬるい眼差しを向けてしまう。遠田は咲子の視線に耐えかねるといった様子で、微かに頬を赤らめて、拗ねたようにパイッと横を向いた。

一度、泥沼の離婚劇を経験したせいかな、遠田は結婚にはかなり慎重だ。

それは恋愛にも表れていた。もともとの性格もあるのだろうが、プレイボーイには程遠い生活を送っている。だからといって、恋人がまったくないわけでもない。これだけの容姿と社会的地位を持っているのだ。群がる女性はあとをたたず、時々恋人と呼べる女性もいた。

だが、本人が自覚している通り、彼には女性を見る目がない。本当にない。

毎度、毎度、何故よりによってこんな女に引っかかるのか！と呆れるほど、トラブルメーカーの女性を引き当てていた。咲子が知ってるだけでも四人。警察沙汰一步手前の騒動が起きている。

だったら大人しく信用のおける誰かに女性を紹介してもらえばいいと思うのだが、それでも失敗した事例を知ってるだけに、咲子にフォローできることはない。

とはいえ、ここ一年ほどは、さすがに反省したのか、遠田のプライベートに女性の影はなかった。「そんな目で見ないでくれ。君にもさんさん迷惑をかけた自覚はある」

「失礼しました。それで何故、私を選ばれたんでしょうか？」

ぼそりと呟く男がしよげて見えて、咲子は苦笑して、話を本筋に戻す。

「これまでの失敗を振り返って、私も色々と考えた。母や妹を除いて、この世で一番信用できる女性是谁か。真つ先に思い浮かんだのは君だった。私に何かトラブルがあったとき、頼れるのも、あとを任せて安心できるのも君しかない」

穏やかに語る遠田の眼差しはとても真摯で、その言葉が嘘や誇張ではないことを伝えてくる。咲子は、胸が熱くなるのを感じた。この上司にこれまでの信頼を寄せられていたことが、泣きたくなるくらいに誇らしかった。

「ありがとうございます。とても光栄です」

その信頼は素直に嬉しいと思つた。だが、そこから何故、咲子が社長の子どもを産むという結論に飛躍するのかわからない。

「ですが、それと先ほどの話がどう繋がるんですか？」

「最初は、信頼している君に女性を紹介してもらおうと考えた。君の人を見る目は信用している。君を選んだ女性であれば、これまでのようなトラブルに陥ることはないだろうと思つたんだ」

—— だったらそれでよくないか？ なんて結論が飛躍した？

咲子の中で疑問が溢れかえる。

遠田の命令なら、咲子は選りすぐりの女性を探してみせる。世の中には、妊娠可能で若く健康で、美しく、トラブルを寄せ付けない女性が数多いのだ。

その中から、遠田と相性のいい、ともに家庭を築いていける女性を選ぶことは可能だろう。

—— なのに、何故、私？

自分で言うのもなんだが、咲子はいたって平凡な女だ。容姿だつて、美人と言われたこともない。ショートボブの黒髪に、垂れ目気味の瞳。左の目尻にある泣き黒子に色気があると言われたことはあるが、それ以上に特筆するべきところはない。

「だが、そこまで考えて気付いた。君も、若く健康で、子どもを産むのに支障がない。世界で一番信頼する女性がすぐ傍にいるのなら、彼女にこそ私の子どもを産んでほしいと思つたんだ！」

—— どこをどうしたらそんな結論に辿り着くんだった！ おかしいでしょうが！  
もうどこから突つ込めばいいのか、咲子はひどい頭痛を覚えた。

「今年三十一歳になる私が若いかというところは、審議が必要かと思いますが？」

「そんなことはない！ 今の医療技術があれば三十一歳は十分に妊娠、出産の適齢期だ！」

「そうですね。まあ、それは今の問題ではないので、ひとまず横に置きましょうか。社長が私の仕事ぶりをそこまで認めてくださっているのは、大変光栄ですし、嬉しく思います。ですが、仕事とプライベートは別です。職業人としての私はともかく、プライベートの私が信頼に足る人間とは言えないかもしれませんよ？」

少し意地悪な気持ちでそんなことを言ってみる。自分で自覚している通りに、遠田には女を見る目がないのだ。咲子だけが例外とは言えないだろう。

「確かに私は、君のプライベートをほとんど知らない。だがこの五年、間近で君の仕事に対する誠

実さをつぶさに見てきた。君と私が過ごした時間は、家族や恋人、友人よりもはるかに長い。誰よりも一緒にいたといっても過言ではないだろう？ その時間の中で、牧原君ほど信頼に足る女性はいないと確信した。私の子どもを産んでもらうのに、君ほど適した人はいない」

満足げに演説する遠田に、咲子は反論が思い浮かばなかった。

確かに遠田の言う通り、この五年、二人は常に一緒に過ごしていた。仕事のためなら世界中を飛び回ることを厭いとわない遠田に付き従い、咲子は休みもろくに取らずに駆けずり回ってきた。

『誰よりも一緒にいた』

この言葉に間違いはない。遠田の言うことも理解できる。

——だけど、何で私が産むって話になるのよ？

咲子は一つ大きなため息をつく。

「仮に、この話をお引き受けしたとして、子どもの養育はどうなさるつもりですか？ 配偶者は必要なくても、子どもの世話をする人間は必要だと思いますが？ それも私がお引き受けするんでしょうか？」

「いや、子どもは、できれば私が自分の手で育てたい。君は自由でいい。母親としての責任を負わせるつもりはないし、今まで通り仕事に打ち込んでくれて構わない。君が望めば、我が社で復職をしてくれ。もし、子どもの傍にるのが気になると言うなら、君の希望する企業への推薦状を用意する。住む場所も生活も私が保証する」

「その間、社長のお仕事はどうされるつもりですか？」

——あなた仕事好きでしょうか？

常に世界中を飛び回っているのに、子どもを育てている暇なんてあるのかと思う。

彼の忙しさは咲子が身をもって体感している。

「仕事は在宅に切り替えて、子どもがある程度大きくなるまでは、私は育休を取るつもりだ。社長みずか自ら育休を取ることは、他の従業員にもいい影響を与えるだろうし、よい企業アピールになる。どうしても私でなければならぬものに関しては、ベビーシッターを頼むつもりだ。君は本当に子どもを産んでくれるだけでいい。迷惑をかけるつもりはない」

「なるほど。そこまで考えての提案ということですね。ですが、それがどういう意味を持つ言葉か、本当にわかってらっしゃいますか？」

「自分が非常識なことを頼んでいる自覚はある。だが、こんなことを頼めるのは君しかいないんだ」

「本当に？ 社長は私に未婚で子どもを産んでほしいと言ってるんですよ？ いくら復職を約束されても、妊娠・出産中に中断される私のキャリアはどう考えてますか？」

遠田の反応を窺うかがいながら、咲子は問いかける。

「もし、出産後、私に好きな人ができて、結婚したいと考えたとき、その子のことが足かせになるかもしれない。逆に私の出産後、社長に運命の相手が現れるかもしれない。そうなったらどうするおつもりなんですか？ 子どものことは確実に問題になります。要らなくなったからといって、お払い箱にできる話じゃないですよ」



現実的な咲子の質問に、遠田は束の間黙りこんだ。

——現実を見て、頭を冷やしてくれ。

咲子はそう願う。だが、遠田は咲子の言うことなんて、とつくに予想済みだったのだろう。

「牧原君の言ったことについても、きちんと対策を立てるつもりだ。妊娠・出産中の君のキャリアについてはもちろん保証する。先ほども言ったが、君が望む職もキャリアも用意する準備はある。落ち着くまでの生活も保障しよう。この先の君の人生に関しても、出産したことが外部に漏れたり、不利になることがないように、最大限配慮するつもりだ。妊娠中はキャリアアップのための留学をしていることにして、極秘で子どもを産めるように手配しよう」

遠田の落ち着いた口調には、少しの揺らぎも感じられない。

「私の子の出産が君の人生の足かせや不利になるようなことは決してないと約束する。私に関しては、この先、運命の女性が現れるとはとても思えない。仮に現れたとしても、君の子を優先すると誓う。それについての契約書も準備している」

——呆れた。

それしか言いようがなかった。

「そこまでご準備されてるなら、私が産む必要はありませんか？ 日本では非難を浴びるかもしれませんが、海外では不妊治療のための卵子提供を請け負う企業や、代理母を扱うエージェントなどもありますよね？」

「わかっている。だが、いくら信用のおけるエージェントだとしても、君ほど信頼できるとは思えない。もしか言いようがなかった。」「そこまでご準備されてるなら、私が産む必要はありませんか？ 日本では非難を浴びるかもしれませんが、海外では不妊治療のための卵子提供を請け負う企業や、代理母を扱うエージェントなどもありますよね？」

聞きよによつては、熱烈な求愛ともとれる言葉なのに、遠田が欲しいのは咲子ではなく、咲子の産む自分の子どもだ。

この状況は一体何の冗談だと思いが、質の悪いことに目の前の上司は本気だった。

「もちろんこんな非常識なことを頼むんだ。ただとは言わない。無事に出産できたあかつきには、君の亡くなったご両親のオーベルジュ。あれを買い戻す資金を提供する。経営の再建にも力を貸そう。君の夢だっただろう？」

遠田の言葉に咲子の両目が驚きに見開かれる。いつかの夜、酔った勢いで語った夢を、遠田が覚えていたとは思っていなかった。

同時に、脳裏に今は人手に渡ってしまった実家の情景がありありと浮かぶ。

緑深い場所にある小さなオーベルジュ。庭には母が大好きな桜が何本も植えられ、春は一面ピンクの霞がかかったようになって美しい。夏は緑の木陰が涼やかだった。秋は紅葉と山の実りを収穫し、冬は静謐な雪景色の中に佇んで春を待つ。四季折々の風景が一瞬で咲子の脳裏を駆け巡った。

フランスで修業した父がシェフを勤め、快活な母が客室係をしていた。常連客に愛され、いつも笑いが絶えなかったあの場所——咲子が何よりも愛してやまない思い出の場所だ。

十七歳のときに両親が事故で亡くなり、手放さざるをえなかった。

いつかあのオーベルジュを買い戻し、再開するのが咲子の生涯をかけた夢だった。そのために、奨学金を受けて大学に進学し、血の滲むような努力の果てに、全国規模のホテルグループである今の職場に就職した。

——社長の子どもを産めば、あそこを取り戻せる？

心が揺れた。それまで冷静であろうとしていた咲子の心が激しく揺さぶられた。

緊張に、喉がからからに渴く。干上がった喉で、無理やり唾液を呑み込んで、口を開く。

「……本当に、あの場所を買い戻していただけますか？」

「もちろんだ。君に生涯のリスクを負わせるんだ。それくらいの報酬は当たり前前だ。口約束では不安だろうから、きちんと書面でも契約書を用意する」

「わかりました。お引き受けします」

気付けばそう答えていた。この先の自分の人生や妊娠・出産のリスクを天秤にかけたとしても、咲子は両親のオーベルジュを取り戻したかった。

「君ならそう言うってくれると思ってたよ」

目の前で満足げに微笑む上司が、まったく見知らぬ男に見えた。

立ち上がった遠田が、契約の締結を祝うように右手を差し出してくる。

その手を見つめる咲子の心が、一瞬だけ躊躇いを覚えた。

だが、咲子はそれを振り切るように立ち上がり、遠田の手を握った。

触れた遠田の手は、火傷しそうなほどに熱かった——

## 第2章 取引条件の変更

気丈な瞳とは裏腹に、遠田の手を握り返してきた咲子の指は微かに震えていた。

それも当たり前前だろうと思う。遠田が彼女に頼んだのは、非常識かつ彼女の人生を大きく左右することだったのだから。

だが、その願いを叶えたいと思ったとき、咲子ほどの適任者はいないと思ったのだ。

その人選に間違いはなかったと、握手を交わす彼女を見下ろして、遠田は一人頷く。

牧原咲子はとても優秀な人間だ。真面目で丁寧な仕事ぶりを気に入って、遠田自ら秘書に抜擢した。仕事においては常に冷静沉着で、トラブルが起こったときに、浮足立つ遠田や周囲に活を入れられる。

顎のラインで切り揃えられたストレートの黒髪。少し垂れ気味な目じりに、左目の泣き黒子が成熟した大人の女性の色気を醸し出している。だが、彼女の印象はいつだって、清楚で落ち着きがあった。

遠田が親族の女性以外で、初めて背中を預けて安心できると思えた女性——それが咲子だった。握手が解かれ、咲子の指が遠田の手をすり抜けていく。手の中に彼女の震える指の感触が残った。その華奢な感触に、遠田はわずかな戸惑いを覚えた。

——彼女はこんなに小さな人だっただろうか？  
そんな思いが彼の胸を過る。

「それで、私はいつこの病院を受診すればいいんでしょうか？」  
「え？ 病院？」

一歩後ろに下がった咲子の質問の意味を咄嗟に掴みかねて、遠田は首を傾げた。  
遠田の返答に、咲子が怪訝そうな表情を浮かべた。

「一応、健康なつもりではありますが、妊娠・出産ができるかはまた別の問題ですから。一度きちんと産婦人科を受診したいと思います。それとは別に、出産場所は海外をお考えになっているようですが、妊娠中の検診場所は検討されているのでしょうか？」

そこまで言われて、ようやく咲子が何を言いたいのか察することができた。

「あ、ああ。そうだな。健康状態は大事だな。女性の体は繊細だ。メディカルチェックについても、こちらで手配しておこう。検診については大学時代の友人の実家の産婦人科を考えている。秘密は絶対に守ってくれる相手だ。人工授精もそちらで頼む予定でいる」

「人工授精……」

遠田の言葉を繰り返した咲子が、何かを考え込む様子を見せた。

「そういえば、妊娠の方法について説明していなかったな。君に負担をかけるかもしれないが、私の精子での人工授精を考えている。妊娠するまで、君にはそこへ通って治療を受けてほしい。もちろんその日は、有給を申請してくれて構わない」

咲子の不安や疑問を少しでも取り除きたくて、遠田は慌てて説明する。

「わかりました。ではそちらの病院の名前と住所を後程メールでいただけますか？ 近日中に受診してきます」

「わかった。その日は有給として扱うから申請してくれ」

無理難題を願い出たのはこちらのはずなのに、淡々と話を進めていく咲子に何故か遠田の方が気が圧される。

「ああ、そうだ。社長」

「何だ」

「一つ申告というか、お願いがあるんですけど……」

「何だね？ 出産に関して、君の希望にはできるだけ応えたいと思っている！」

意気込む遠田に、驚いたように咲子が半歩後ろに足を引いた。そうして、困ったように俯く。さりと流れた髪が、彼女の表情を隠す。

束の間、二人の間に沈黙が落ちた。

咲子は覚悟を決めるように、肩で大きく息を吐き出して、顔を上げた。その顔がうつすらと赤らんでいることに気付いて驚く。

——何だ？ そんなに言いにくいことなのか？

滅多に顔色を変えることのない咲子の初々しい表情に、遠田まで緊張してくる。

「……私には男性経験がありません」

思い切ったように告げられた言葉の意味を掴みかねる。

——男性経験がない？

頭の中で咲子の言葉を繰り返して、驚愕に目を瞠った。思わず咲子の頭の上から足の先まで、視線を巡らせてしまう。遠田の視線の強さに、咲子が怯えたようにびくりと体を竦ませた。

——嘘だろう!?

遠田より頭一つ分以上小さい彼女は、大人の女性らしい体つきをしていた。適度な胸の大きさにくびれた腰をパンツスーツに包んだ姿は、禁欲的で人によっては欲情をそそるだろう。実際、そんなことを遠田に言ってくる輩もいた。

だから、咲子の言葉が予想外すぎて、遠田は絶句した。

——彼女に触れた男がない？

そう思った瞬間、遠田は自分の肌が粟立つような感覚を覚えた。快感にも通じるその感覚に、遠田は動揺する。

今の今まで、そういった目で咲子を見たことはなかったはずなのに、一気に彼女が一人の女性であることを意識してしまう。

——ちよ、ちよと待て！ 落ち着け自分!!

「どこかの神の子みたいに、処女懐胎というのは、さすがにどうかと思うのですが……」

「処女懐胎……」

咄嗟に連想を避けた言葉を、そのまま告げられたものだから、遠田は自分の視界が赤く染まった

ような気がした。鼻の奥がむずむずと疼いて、鼻血でも出そうな予感に、遠田は慌てて手で口元を覆った。

「なので……社長さえお嫌でなければ、最初だけ普通の方法で妊娠を目指してみたいのですが……」

——表情と言動が一致してないだろう！

頬は赤いのに、いつもの淡々とした仕事のときの表情を浮かべて話す咲子に、遠田の動揺がひどくなる。

「私相手では無理だと仰るなら諦めますが……」

「そんなことはない！ 君は魅力的だ！」

尻すぼみに小さくなつていく咲子の声に、思わず叫んでいた。声の大きさに咲子が驚いたようにきょとんと目を瞠る。

一度、二度、咲子が瞬きを繰り返す。その姿に、自分の狼狽えぶりを自覚した。

——わ、私は一体何に動揺しているんだ？ 童貞でもあるまいし、落ち着け！

「それはありがとうございます？ では問題ないですね」

何故か疑問形で礼を言った彼女が小首を傾げた。その仕草がやけに可愛らしく見えて鼓動が速くなる。

「ああ。そうだな」

思考が空転していて、何か大きな問題があるような気がするのだが、それが何かわからない。

「では、お話がそれだけであれば、今日はもう失礼してもいいでしょうか？」

そう尋ねる咲子は、ミス・パーフェクトと陰で言われる、いつもの冷静沈着な姿に戻っていた。  
「ああ。もちろんだ」

「ありがとうございます」

何とか平静を装って頷くと、咲子は上半身を屈めて、テーブルに置いていた手帳を手を取った。  
遠田の視界に、彼女の白いうなじが晒され、目線が吸い寄せられる。

——彼女の肌はこんなに白かったのだろうか？

そんな疑問が頭の中を駆け巡る。見慣れているはずの彼女が、まったく見知らぬ女性に見えた。  
遠田の眼差しに気付くことなく、咲子が顔を上げた。

「それではスケジュールを調整して、近日中にメディカルチェックを受けてこようと思います。その結果報告と合わせて、直近の排卵日を算定してご報告するというところでよろしいですか？ 取引の開始はそこから大丈夫でしょうか？」

畳みかけるように告げられる事柄に、遠田の方がついていけなくなりそうだった。

遠田は必死に頭を回転させて、今必要であろうことを告げる。

「問題ない。こちらも先ほど言った内容を契約書類に起こしておく。あとは出産場所に考えている病院の資料も用意しておくよ」

「お願いします。では、今日はこれで失礼します」

「ああ。気を付けて帰ってくれ」

「はい」

何事もなかったように社長室を去る咲子を見送って、遠田は応接ソファにどかりと腰かけた。

——あんな非常識な願いを叶えてもらえなくなったのに、何故、俺の方がこんなに動揺しているんだ？ まるで俺の方がおかしな取引を持ちかけられた気分だ。

眼鏡を外して、テーブルに投げ出すように置くと、遠田は両手で顔を覆う。

今さら咲子が女性であることを、ひどく意識している。

これは願ってもない申し出のはずだ。迷う必要も動揺する必要もない。

子どもの母親には、彼女しかいないと望んだのは自分なのだから——

☆

自宅に帰って来た咲子は、荷物をソファの上に放り出して、床の上にへたり込んだ。

こんな早く帰宅できたのは久しぶりだろう、と思う時間に帰ることができたのに、いつも以上の疲労感を覚えている。

——私、社長に何を言った？

自分の行動が信じられなくて、自己嫌悪のあまり穴を掘って埋まってしまいたい。  
だが、埋まる穴を掘る気力もなく、とりあえずソファの座面に顔を押し付けた。

——本当に何の取引を引き受けたの私？

今頃そんなことを考えたところですべてが遅い。

頬に触れるひやりと冷たい合皮の感触に、やっと夢から覚めたような気持ちになる。

遠田に子どもを産んでほしいと言われてからの出来事は、どこか現実感が薄く、あれが夢だったと言われたら納得してしまいそうだった。

だが、現実はそう甘くない。

咲子がそう思ってるのを見透かすように、仕事用のスマートフォンがメールの着信を告げた。指先一つ動かすのすら億劫おちくうに感じているのに、何か緊急事態かもしれないと、体は勝手に動き出す。顔を上げた咲子は鞆たもとからスマートフォンを取り出して、メールを確認した。

発信者は遠田だった。メールの内容は彼の友人の実家だという産婦人科の病院名と住所。ご丁寧ごていねいに病院のサイトのURLまで添付されている。だめ押しのように現実を突きつけられた気がした。

「さすがに仕事がお早いことで……」

遠田はそれだけ本気だと言うことだろう。変な感心をしてから、脱力感が咲子を襲った。

返信するべきなのだろうが、今は何もかもが面倒で、スマートフォンをソファの上に投げ出した。再びソファに顔を埋めた咲子の唇から、盛大なため息が吐き出される。

——あの取扱とくわはともかく何でわざわざ社長に処女なんて自己申告したのよ、私？

三十一年の人生の中でも、あれは五指に入る失敗だった。

忘れられるものなら今すぐ忘れてしまいたい。

遠田の記憶からも消し去ってしまいたいと強く願うが、そんなことは叶うわけがなかった。別に後生大事に、守ってきたわけではない。これまでの人生で、縁がなかっただけだ。

十七歳で両親を事故で亡くし、父方の祖父母の援助で何とか高校を卒業した。だが、高齢の祖母に負担をかけたことなく、大学は奨学金とバイト代で賄まかった。

就職はいつか両親のオーベルジュを取り戻すことを夢見て、日本で最大のホテルグループを目指した。少しでも就職に有利になるようにと、バイトの合間に取れる資格はすべて取った。

就職難と言われていた当時、第一志望の内定をもらったときは、飛び上がるほど喜んだのを覚えている。

最初の二年は客室係としてがむしゃらに働いた。吸収できるものは何でも吸収した。その仕事ぶりが認められて、次の三年はホテルのウェディング企画室に引つ張られた。

そして、遠田の友人の結婚式を担当したのをきっかけに、社長秘書に抜擢はうてきされたのが二十六歳のとき——それから今日まで五年間。ワーカホリック気味の遠田に秘書として仕える日々は、ジェットコースターのように、あつという間に過ぎ去っていった。

恋愛にうつつをぬかす暇なんてなかった。もともとその手のことにあまり興味がなかったのも相まって、この年まで貞操を守り抜いてしまっただけのことだった。

ただあのとき、遠田に当たり前のように人工受精を提案されて、処女のまま妊娠するなど、いくらなんでもあり得ないだろうと思った。

——でもそれは、建前でしかない。

一度くらい女として、誰かに愛されてみたい——渴望かつぼうと言えるほどに強く、そう思ったのだ。自分の中にそんな望みがあったことに驚いた。

両親を亡くした十七歳の日から、夢に向かつて無我夢中で走り続けてきた十四年間。

——後悔なんて何もなかったはずなのに、自分の心の奥底にはあんな願いが眠っていた。気付かずにいた想いを、思わぬ形で自覚させた遠田が、恨めしくなる。

ただの八つ当たりだ。それはわかっている。だけど、今晚くらいはあの底抜けにバカな上司を恨んでも、バチは当たらない気がした。

これから先の人生、仕事一筋で生きていくと決めてるわけではない。

亡くなった両親は、娘から見ても相思相愛でラブラブだった。常連客に万年新婚夫婦いつも椰揄からかわれていた両親を間近で見育ててきたのだから、咲子にも結婚願望くらいあった。

運命の王子様が迎えに来ると信じるほど夢見がちではなかったが、いつか人生をともにしたいと思える人が現れると信じるくらいには、平凡な女だったはずだ。

——私って、案外ずるいというか、汚い人間だったのね。

どうしても叶えたい夢のために、上司の子どもを産む。

そんな決断ができてしまった自分の人間性が、自分でも信じられなくなりそうだ。

亡くなった両親もあの世で、娘の決断を嘆いているかもしれない。

それでも、誰にどんな非難をされても、この取引が自分の人生に大きな影を落としたとしても、咲子は両親のオーベルジュを取り返したいのだ。

視界が何故か歪ゆがんだ。泣きたくもないのに、涙が滲にじんできて、咲子は瞼まぶたを強く閉じる。

——今さら泣くな!! 泣くくらいなら、あんな取引に応じるな、馬鹿!

後悔するのは好きじゃない。

遠田は尊敬できる人間だ。彼は、咲子が人生の目標にしてきた男だった。

男性としての魅力もある。その上司が、数多あまたいる女性の中で、子どもの母親として咲子を選んだ。そのことは誇っていいはずだ。それだけの信頼を寄せられたのだから。

きつと遠田は言葉通りに、咲子の人生を守ってくれるはずだ。

——きつと大丈夫。社長は一度約束したことは守る男だ。

「でも、あの人、女を見る目が本当じゃないからな」

ぼつりと呟いて、咲子はくすりと小さく笑った。

——本当、とことん見る目がない。だから、私なんかこんなでたらめなことを頼んだりするの  
のだ。  
人生とはままならないものだと、咲子は心の底から思った。

☆

「あー、ついに来たか」

排卵チェッカーに出た陽性反応に、咲子はトイレの壁にゴツツと額ひたいを打ち付けた。

——痛い。夢ではないらしい。

例の取引を持ちかけられてから二週間——咲子の排卵日が来た。

体を起こして、痛む額を手で押さえる。

念のためにもう一度、排卵チェッカーの反応を確認するが、そこにははっきりと陽性反応が出た。これは明日、排卵が起こるというサインだ。

もともと咲子の生理周期はあまり狂ったことがない。スマートフォンのアプリで管理している基礎体温と照らし合わせても、この結果は間違いないだろう。

——明日からの社長のスケジュールってどうなってるわけ？

排卵チェッカーを手に、トイレに座ったまま咲子は頭の中で遠田と自分の予定を思い浮かべる。幸いというか何というか、変更可能な予定ばかりだった。

余程、緊急のトラブルでもなければ、遠田が動く必要のないものだ。

折しも明日は金曜日。週末の予定は特に聞いてない。

——取引の開始は明日か……

覚悟はとつくと決めたはずなのに、いざとなればやっぱり怖いと思う。

メディカルチェックの結果を報告したとき、喜ぶかと思つた遠田は、何故か無言で黙り込んでいた。その様子から、一時は中止を言い渡されるかもしれないと思つたが、彼は宣言通り契約書を用意し、取引継続のまま今日まで来た。

もし、遠田が取引に躊躇いを覚えているのだとしたら、それは、咲子がつけた無茶な条件のせいかもしれない。ふとそんなことを考える。

——男性にとって処女はめんどくさいって聞いたことあるしな。

若くて可愛らしい女性であれば、処女でも自分好みに育てる楽しみがあるだろうが、相手が咲子であればそんなわけにもいかないだろう。

咲子は、妊娠するには十分すぎるくらい健康ではあるが、たいして若くもなければ可愛くもないお局様と言われても仕方ない年だ。

だが『無理なら諦める』と言つたとき、遠田は咲子の言葉を遮るように、それを否定してくれた。たとえ咲子を傷付けないための嘘だつたとしても、あれは嬉しかったと思う。

遠田の躊躇いの理由が、咲子を抱くことならば、今からでも撤回しようと思える。ベッドの上で、やっぱりダメだと言われたら、いくら咲子でも立ち直れない。

余計な条件などつけずに、あくまでビジネスライクに話を進めていればよかったと今さらながら後悔する。だが、放ってしまった言葉は取り消せない。

この二週間の間に、後悔は嫌になるほどしたし、自己嫌悪にも陥った。もうこれ以上ないほどに、落ち込んだのだから、あとは浮上するだけだと咲子は開き直ってる。それに、こんなことでせつかく遠田との間に築き上げてきたものが崩れるのは、咲子にとつても本意ではなかった。

ただ、やはり未知の経験は怖いと思うし、不安になるのは仕方ない。

「あ、やばい。こんなところで、考え込んでる場合じゃない。遅刻する！」

腕時計に目線を落として、咲子は慌てて排卵チェッカーを汚物入れに片付けると、トイレを出た。

——人生なるようにしかならない。深く考えたらドツボに嵌るだけ。



もう自分はまな板の上の鯉だと覚悟を決めて、咲子は家を出た。

「おはようございます」

「おはよう。今日の予定はどうなっている？」

いつも通りに出社して、遠田と今日の予定を打ち合わせていく。

「わかった。それで進めてくれ。他に報告はあるか？」

スケジュールに大きな変更はなく、確認は五分もかからずに終了した。

珈琲を手に、最後に確認するように尋ねてくる遠田に、咲子は一瞬だけ躊躇った。

羞恥で体が熱くなる。だが、ここで報告しないのは契約違反だ。

「一件、ご相談があります」

「何だ？」

珈琲に口を付けながら、書類を広げていた遠田が、咲子の言葉に顔を上げた。

その顔を真っ直ぐに見つめて、咲子は意を決して口を開く。

「例の取引の件についてです。今朝、排卵チェッカーが陽性になりました。明日から排卵が始まりますが、明日の予定を……社長!?」

一瞬だけ、どうやって伝えようか迷ったが、取り繕ったところで意味はないだろうとストレートに伝えた。

途端に遠田は目を剥いて硬直し、手にしていた珈琲カップを派手な音を立てて、ひっくり返した。

デスクの上に、みるみる珈琲の水たまりができる。遠田はものすごく焦った顔で書類を避難させ、傍にあったティッシュを豪快に引き出して、テーブルを拭き出した。

「社長、大丈夫ですか!? 火傷はしてませんか？」

咲子も慌てて珈琲と一緒に出しておいたおしぼりを手にして、遠田に歩み寄る。遠田の高級スーツの上着にも珈琲の飛沫が飛び散っていた。

「あ、ああ。私は大丈夫だ。何ともない。すまない」

打ち合わせの間に珈琲はぬるくなっていたのか、遠田に火傷した様子はない。

——これくらいならすぐにクリーニングに出せば落ちるわね。あとでホテルのクリーニング部門に依頼しておこう。替えのスーツは用意してあったはず。

そんなことを考えながら、「染み抜きをするので、上着を脱いでください」と咲子は遠田を促す。

「いや、自分でできる」

遠田は我に返ったように立ち上がり上着を脱ぐと、おしぼりを受け取ろうと手を伸ばしてきた。

二人の手が触れ合う。咲子は咄嗟にその手を引きそうになったが、それより早く、遠田に手首を掴まれた。掴まれた手が、取引を持ちかけられた日と同じだけ熱を孕んでいる気がして、咲子は息を呑む。

「社長……?」

「明日なのか？」

掠れているのに、どこか艶を含んだ遠田の声が咲子の耳に届いた。

掴まれた手首が熱い。肌がざわりとして、鳥肌が立ちそうだった。

「明日なんだな」

遠田がもう一度、確認してくる。

その問いに、掴まれていた自分の手首を見下ろしていた咲子は、顔を上げた。真っ直ぐ、射抜くような強さで、こちらを見る遠田と目が合った。視線が絡み、目が離せなくなる。

遠田の瞳の奥に焔ほのおが揺らめいているように見えた。それが何を意味しているのか、わからないほど鈍感ではない。

女を欲する男の瞳だ——ここにいるのはいつもの上司ではなく、一人の男なのだを知る。

一瞬で口の中が干上がった。遠田の眼差しに煽あおられるように、咲子の肌も熱を上げる。

「明日、です」

もう一度、答える。その声は、自分でもびっくりするくらい、小さかった。それでも、遠田にはしつかり聞こえたのだろう。

咲子の手首を掴む遠田の指に力が入った。痛みを感じるほどの力に、咲子は思わず顔を顰しかめる。

「あ、すまん！ つい力が！」

それに気付いた遠田が、慌てて咲子の手を離れた。力の抜けた咲子の手からおしぼりが落ちる。でも、それを拾う心の余裕はなかった。

咲子は掴まれていた手首を胸元に引き寄せる。遠田の手の感触が、はっきりと残っていた。

「強く握りすぎた。大丈夫か？」

遠田が咲子の顔を覗のぞき込むようにして、確認してくる。

「大丈夫です……」

遠田の端整な顔が間近に迫って、咲子は咄とつ嗟さに一步後ろに下がった。

先ほどの欲情に濡れた遠田の瞳を思い出し、彼の顔を見ていられなくて俯うつむく。

何とも言えない気まずい沈黙が落ちた。互いに相手の様子を窺うかがっているのがわかる。だけど、どちらも何を言えばいいのかわからなかった。

——このまま足元ばかり見ていたって、仕方ない。

咲子は視線を上げた。遠田の手が視界に入った。彼は手を握ったり、開いたりを繰り返している。それを見て、緊張して戸惑っているのは自分だけではないと気付く。

咲子と違って、遠田はそれなりに恋愛経験があるはずなのにと思えば、肩の力が抜けた。

遠田の顔を真っ直ぐに見上げる。目が合った彼の肩が、ぴくりと跳ねた。

遠田の方が緊張しているように見えて、咲子は笑ってしまう。

咲子にあんなでたらめな取引を持ちかけてきた人と、同一人物とは思えなかった。

——本当にこの人は、どうしようもない。でも、だからこそ憎めない。

「お嫌なのかと思ってました」

「え？」

「私の相手をするのが……これまで社長がお付き合ひされてきた方たちと比べて、私は特別美人でも可愛らしくもない。そのうえ、いい年ですからね」

性格はともかく遠田のかつての恋人たちは、若くそして美しい女性たちばかりだった。

それを知っているだけに、咲子の声音に自嘲が宿る。思わず臉を伏せた咲子に、遠田が前のめりになって顔を覗き込んできた。

「それはない！ 君は十分に若くて、綺麗だ！ とても魅力的な人だ！ そんな風に卑下する必要はない！」

力強く否定されて、咲子は目を瞬かたせる。吐息の触れる距離にある、遠田の美しい顔をまじまじと見つめてしまう。近すぎる距離に気付いた遠田が、焦ったように飛びのいた。

「私にこんなことを言われても、嬉しくないかもしれないが……」

——何でここで、急に自信をなくすかな？

へにやりと眉毛を下げた男の言葉に、咲子はくすりと小さく笑った。

「子どもの遺伝子的な母親にと望むくらいには、魅力的ですか？」

わざと茶化してそう言えば、遠田の眉はますます情けない角度に下がった。

自分を落ち着かせるように、遠田が「はー」と大きく息を吐き出した。

「それだけで君を選んだわけじゃない。今さらこんなことを言っても、信じてもらえないかもしれないが、君は女性としてもとても魅力的だよ。実際、私は今、恥ずかしいくらいに、牧原君に対してがついていた」

——がつついていたんだ……

あのとき、遠田の瞳の奥に宿っていた焰は、やはり欲情だったのかと納得する。

「むしろ君の方が嫌じゃないのか？ は、初めてなのに……」

私でいいのかと眼差しで問いかけてくる男に、咲子は微笑んだ。

言いにくそうに言葉を詰まらせた遠田を見上げて、初めて彼がいいと思った。

——私の初めての相手は社長がいい。今まで、社長をそういつた目で見たことはなかったんだけど。人生何が起こるかかわからないわね。

内心で苦笑して、咲子は今度こそ本当に覚悟を決める。

「お願いしたのは私です」

「だが！」

何かを言いかける遠田の唇に人差し指を当てて、その言葉を遮る。

「別に後生大事に守ってきたわけじゃないんです。本当に縁がなかっただけで」

咲子は真っ直ぐに眼鏡の向こうにある遠田の瞳を見つめた。

「私の初めての相手は、社長がいいです。子どもを産ませたいと思うほど、私を欲しがってくれたあなただから、いいんです」

たとえそれが恋愛感情に起因するものでなくても、そこまで咲子を欲しがってくれたのは遠田だけだ。

——だから、私は社長がいい。

きっぱりと告げた咲子の言葉に、遠田が鋭く息を呑んだ。そして次の瞬間、覚悟を決めたようにふっと表情を緩ませた。

「わかった。君が望むなら最高の夜を約束する」

遠田の表情にはさつきまでの情けなさはもうなくて、咲子は内心で苦笑する。

——自信家だなー。

それだけ経験があるのかと思えば、ちょっとだけムツとする。女心は複雑だ。

でも、今の遠田の方がいつもの遠田らしくて、咲子は安心する。

「お願いします」

「明日の夜のスケジュールは？」

「すべて変更可能なものです」

「わかった。週末も含めて、すべて空けてくれ」

「はい」

「それと、どこかに部屋を……」

「あ、それはやめましょう」

遠田の提案を察した咲子が、先回りして止める。遠田が訝しげに首を傾げた。

「社長と私がホテルでそんなことになったら、あつという間に秘密が秘密じゃなくなりますよ。系列外のホテルであつたとしても、リスクが高すぎます」

「それも、そうだな」

納得した様子で頷いた遠田は、一瞬、迷うように口元を手で覆った。だが、すぐに手を下ろし、「では、私の部屋でどうだろう?」と提案してくる。

「社長のご自宅ですか?」

「ああ。私の部屋であれば、君も何度か出入りしているし、今さら誰も不審には思わないだろう。セキユリティもしっかりしているから、誰かに見られる心配もないはずだ」

「そうですね。わかりました。仕事が終わったら、お伺いします」

「ああ」

頷く男の眼差しに宿る熱に、咲子は沈黙する。

ともに過ごす夜を想像して、二人は同時に胸を疼かせた——

☆

咲子は自宅のクローゼットの前で途方に暮れていた。

これから遠田の部屋に行かなければならないのに、何を着て行ったらいいのかわからない。

一応、下着はこの日のために新しいものを用意していたけれど、洋服のことまで頭が回っていないかった。

——いや、別に服はどうでもいいのかもしれないけど……

多分、遠田なら咲子がどんな格好をしていても気にしないだろう。

しかし、そこは女心だ。少しくらいはおしゃれがしたかった。

だが、目の前のクローゼットに並ぶのはほとんどが仕事用のスーツ。しかも動きやすさを優先し

て選んでいるからほぼすべてがパンツスーツで、機能的な美しさはあっても、おしゃれとは対極にある。おまけに私服はカジュアルなものばかりで、遠田の家に着ていくには勇気がいった。

ここ数年、仕事の忙しさにかまけて、女を捨てていたことを自覚させられる。

——私の女子力が行方不明だ。

咲子はクローゼットの中を見渡して眉間に皺を寄せる。

——あんまり時間ないのに、どうしよう？

移動時間を考えると、そろそろ用意を終えて、家を出なければ約束に間に合わない。

この二日、表面上はいつも通りに仕事をこなしていた。

けれど、二人きりになったときの空気は、やはり何かが違った。

それをあからさまに出すほど、咲子も遠田も子どもではなかったが、ふとした折に宿る熱はどうしようもなかった。

期待と緊張と不安がないまぜになった、名状しがたい感情が確かにそこにはあった。

とりあえず、いつものお堅い秘書の仮面で通したが、それなりに恋愛経験も女性経験もある遠田が自分以上に戸惑っている様子に、安心する反面、咲子の心は揺れ続けた。

ため息をついて項垂れた咲子の視界に、未開封のショッパーが飛び込んでくる。そのインポートブランドのロゴに、記憶を掠めるものがあつた。

——これって確か……

咲子は屈んでショッパーを引っ張り出す。ロゴテープを破って開封し、中身を取り出した。

薄紙で丁寧に梱包されていたのは赤いワンピース。ノースリーブのシンプルなデザインだが、生地じの鮮やかな色が目を引く。

いつだったかの休日に、久しぶりに街に買い物に出て衝動買いたしたものだった。

ショーウィンドウに飾られた赤があまりに綺麗で、一目惚れだったのを思い出す。

ただ、買った方がいいが、こんな鮮やかな色のワンピースは、自分には似合わない気がして、帰つて来た直後に後悔した。

手放すには好きすぎて、でも着こなす自信もなかったそれを、ショッパーに入れたままクローゼットの片隅に仕舞い込んでいたのだ。

——買ったのは二、三年前くらいだったかな？ サイズはあまり変わっていないはず。

ワンピースを手に躊躇ためらっていたのは、ほんのわずかな時間だった。

今まで忘れていたワンピースの存在を思い出したのは、何かの啓示のように思えた。

タグを切つてワンピースを身に纏まとうと、全身が映る姿見の前に立つ。

鎖骨がはつきり見えるデコルテラインの広さと、膝上のスカート丈に戸惑う。

だが、いつものパンツスーツよりは格段に女らしい。

全身を眺めて、咲子は束の間迷った。

だがふと、これくらい思い切つてもいいのかもしれないと思つた。

——今晚一晩だけ、シンデレラになりきってみる。

ガラスの靴もかぼちゃの馬車もなく、自分を好きになつてくれる王子様もないけれど、今日は

咲子にとって特別な夜だ。

『君は女性としてもとても魅力的だよ』

欲情に濡れた瞳でそう言った遠田を思い出す。その言葉が、迷う咲子の背中を押した。

——今晩一晩だけ、私は奔放なシンデレラになる。

自信なさげに鏡の前に立つ女に向かって、咲子は微笑んだ。

明日の朝になれば、魔法は解ける。

その瞬間まで、いつもと違う自分を楽しもう。そう決めて、咲子は服に合わせてメイクを変えた。

普段は使わないマスカラをつけ、深紅のルーージュを唇に塗る。

アクセサリーボックスから、黒のビジュアのネックレスとセットのピアスを選んだ。

ガラスの靴の代わりに、七センチのピンヒールを履く。

お堅い秘書の仮面を捨てて、奔放なシンデレラに自分を変えていく。

咲子は全身のコーディネートを確認するためもう一度、姿見の前に立った。

——うん。悪くない。

頭の中から爪先までじっくり眺めて、咲子は艶やかに笑ってみせる。

少しかけ見慣れない女が、鏡の中から微笑みかけてくる。

いつもとは違う自分に向かって一つ頷いて、咲子は遠田が待つマンションへ向かうため家を出た。

☆

遠田は自宅のソファに微動だにせずに、座っていた。

これから咲子が来る。時間に正確な彼女のことだから、あと十五分もすれば確実にやって来るだろう。そう思うと、興奮で体が熱くなる。

いい年をして何があついているのかと自分でも呆れていた。

少しでも気持ち落ち着けたくて、遠田は大きく息を吐き出した。

どんな大口の取引の前でも、こんなに緊張したことはない。

——何をやっているんだ俺は……

手のひらで顔を覆って、遠田はこの二週間の自分の行動を振り返る。

あの非常識ででたらめな取引を持ちかけたのは遠田だった。だが、いざ事が動き出してみれば、冷静さを失っているのは遠田の方だった。

咲子はさすがというか、なんとというか。最初こそ、困惑している様子だったが、翌日には平静に戻っていた。

あまりに咲子が普段通りなので、遠田の方がどんな風に接したらいいかわからなくなっていた。咲子を意識しすぎて、完全に普段の己を見失っていた。

そんな遠田の態度が、彼女にあんな不安を与えていたとは思わなかった。

『お嫌なのかと思つてました』

ぽつんと呟くようにそう言つて、まがた瞼を伏せた咲子が、傷付いているように見えて焦つた。慌てて否定した遠田に、彼女はわざと茶化すようなことを言つて、笑つてみせた。

その笑顔がとても綺麗で、無意識に見惚れていた。

一人の女性として意識した咲子は、魅力的な人だった。

サラサラの黒髪に、きめの細かい白い肌、女性らしい柔らかさを持つ肢体。左目の泣きほくろ黒子は大人の女の色気があつた。

性格は穏やかで、いつでも冷静沈着。とさき咄嗟の機転も利く。

一緒にいて、誰より信頼ができて、ホツとできる女性。

本人は縁がなかつただけと言うが、咲子ほどの人がよくぞ今まで無垢むくでいられたものだと思う。彼女との子どもを望む遠田にとつて、父親を疑う心配がないというのは僥倖きやうじやうであつた。

だが、同時に自分でいいのかと恐れにも似た気持ち覚える。

しかし、そんな遠田の心を見透かしたように、咲子は言つた。

『私の初めての相手は、社長がいいです。子どもを産ませたいと思うほど、私を欲しがつてくれたあなただから、いいんです』

決意を秘めて、真つ直ぐに自分を見つめてきた咲子に、遠田は落ちた――

取引のためとはいえ、咲子が自分を選んでくれたことが誇らしかつた。その気持ちに、男として応こたえたいと思つた。

だが、最高の夜を、と意気込む遠田に、咲子は特別なことは何もいらないと言つた。

花も宝石も用意しなくていいと、先に釘を刺された遠田は、内心途方に暮れた。

この五年――誰よりも一緒に過すごしてきた私設秘書の咲子には、女性に対する遠田の手の内がすべて知られている。

今さら格好つけたところで、咲子には敵かたわない。余計なことをして、すべてを台無しにするよりは、咲子の言うことを聞いて大人しくしている方がいいだろうと、遠田は無駄なあがきをやめた。

せいぜい遠田にできたことは、咲子が好きだと言つていた赤ワインを用意して、酒のつまみを用意することくらいだった。

――本当にいい年をして、俺は何をやっているのだろうな？

遠田の唇から苦い笑いが漏れたとき、玄関のチャイムが来客を告げた。咲子らしい約束の時間の五分前。

タワーマンションの最上階にある遠田の部屋は、専用の鍵を使ってエレベーターに乗らないとここまで上がつてこれない。

今、その鍵を持つているのは海外にいる母親と家事代行サービスの人間以外、咲子だけだ。

遠田の胸が早鐘を打ち始める。急いでソファから立ち上がり玄関に向かうと、モニターを確認することなくドアを開けた。驚きに目を睜ひらっていた咲子が、苦笑した。

「相手を確認せずに、玄関を開けるのはどうかと思いますよ？」

困つたように微笑み、そう注意してきた咲子は、仕事のときとまったく雰囲気違つていた。い

つもより赤く色づいた唇が、遠田の視線を引き付ける。

——キスがしたい。

瞬時に、そんな即物的な感情が湧き上がる。

上着を手にして立つ咲子は、深紅のワンピースを身に纏っていた。女性らしい柔らかな体のラインが露わになっていて、遠田は思わず息を呑んだ。

気付けば、言葉もなく咲子の美しさに見惚れていた。

「社長？」

困ったように咲子から呼びかけられて、遠田はハッと我に返る。

「ああ、入ってくれ」

遠田は体を横にして、咲子を自宅に招き入れる。

「お邪魔します……」

瞼を伏せてそう返事した咲子の表情は、いつもより硬い気がした。

「ソファに座っててくれ」

「はい」

咲子は遠田に言われるまま、大人しくソファに座った。

「ワインでもどうだ？ 君が好きだと言っていたワインを取り寄せたんだが……」

キッチンに入った遠田はワインクーラーで冷やしていたボトルを出して、銘柄が咲子に見えるように掲げて見せた。

「いただきます」

それを見た咲子の顔が、嬉しそうに綻んだ。明るくなった彼女の表情に、遠田はホッとする。手早くコルクを抜いて、ワインをグラスに注ぐ。微発砲のワインが軽やかな音を立てた。

二人分のグラスを手に、咲子の元に向かう。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

グラスを渡して、遠田は咲子の隣に座った。ぴくりと咲子の肩が跳ねた。

それに気付かない振りをして、遠田がワイングラスを掲げて見せれば、意図を察した咲子もグラスを掲げる。

「取引の開始に……」

そう言ったのは咲子だった。カチンと澄んだ音を立てて、グラスが合わさった。

遠田の返事を待つことなく、咲子がワインに口を付ける。

いつもの彼女らしくない行動に、遠田は咲子の緊張を感じ取った。

「緊張している？」

咲子がグラスをテーブルに置くのを待って、そう問いかければ、咲子の肌が一瞬で赤く染まった。視線を泳がせて、咲子は小さく息を吐き出す。そして、意を決したように遠田に向き合う咲子の瞳は潤んでいた。

その瞳を見た瞬間、遠田は自分の理性が音を立てて切れたのを感じた。



気付けば、咲子の手首を掴んで、自分の腕の中に引き寄せていた。

吐息が触れる距離で、彼女の顔を覗き込む。

驚きに見開かれた咲子の瞳に映る自分は、飢えたケダモノの顔をしていた。そんな自分に自嘲するが、湧き上がる衝動は抑えられなかった。

咲子が答えを口にするよりも早く、その赤い唇を塞いだ――

☆

触れた男の唇は、火傷しそうなほどに熱く感じた。

「……んあ」

一瞬、何が起きたのか咲子にはわからなかった。腕を引かれて、顔を覗き込まれたと思ったたら、遠田に唇を塞がれていた。

――あ、キスしている？

そう認識した途端、咲子の全身がカッと羞恥で熱くなった。

驚きに目を瞠って、咄嗟にもがく。いきなりすぎて感情がついていかない。けれど、遠田の手にしっかりと後頭部を押さえられ、動きを阻まれる。

咲子は呆然と目を開けたまま、遠田の唇を受け入れた。整いすぎて硬質な印象のあった唇は、予想外に柔らかく、温かかった。

混乱してどうしたらいいのかわからず、咲子は無意識に息を止めていたらしい。優しく唇をついばまれて、息の仕方を思い出す。

微かに喘いだ瞬間を狙って、遠田の舌が咲子の唇の中に侵入してきた。

口蓋に男の舌先が触れて、神経を直に舐められたような衝撃が咲子を襲う。

反射的に首を反らすとさらに口が開いて、互いの唇の密着度が増した。

肉厚で柔らかなものが、咲子の唇の中を探る。まるで遠田の舌自体が意志を持って動いているかのように、的確に咲子の性感を煽ってきた。

ぞくぞくと疼きにも似た感覚は、今まで感じたことのないもので怖くなる。

自分で望んだはずなのに、未知の感覚が咲子を混乱させた。

どうにか逃げようとして、遠田の胸に手をつき強く押す。思うよりも簡単に唇が解放されて、咲子は大きく息を吸い込んだ。

「あ、ふう……っ！」

零れ落ちた吐息は、自分でも聞いたことがないほど甘い女の声をしていた。

息が上がって苦しいし、舌も痺れている。相手の唇が唾液で濡れ光っているのに気付いて、咲子は直視できずに視線をうろつかせた。

――恥ずかしすぎて、社長の顔が見られない。

今さらのようにたじろぐ咲子の顎を遠田が持ち上げた。長い指で唇を拭われ、びっくりと肩が跳ねる。過敏すぎる自分の反応に狼狽えて、咲子は目を伏せた。

そんな咲子のうぶな反応に、くすりと遠田が笑った。その声に含まれる艶びんぎに、咲子の体は熱を上げる。

「キスは嫌だった？」

問われて、咲子は無言で首を横に振る。

——嫌じゃない。むしろ気持ちよかった。だからこそ怖い。

「そうか。ならよかった」

口づけの余韻を刻み込むように、遠田の指が咲子の唇の形を辿る。

視線を下げている咲子の視界には、遠田の手だけが見えていた。男性らしい大きな手。けれど指は長く爪の先まできちんと手入れされている。生まれながらの支配者の手だと咲子は思った。優しやさしいのに抗あえない。

蠱惑こわく的な声と指が、咲子を翻弄ほんろうし、支配する。

昨日、社長室で咲子以上に狼狽うろたえていた男とは思えなかった。

こちらが遠田の本性なのかもしれない。優しい気な紳士の顔の下に、獠猛じょうもうな牙を隠し持っている。

遠田のキスは、彼そのものだ。優しいのに強引で、気持ちよくて、咲子の心をかき乱す。

「もう一度しても？」

囁ささくように確認を取られて、咲子は東の間、惑う。遠田の指がもう一度、咲子の唇の形を辿る。

イエス以外の答えは聞かないと、その指が言っている気がした。

恥はずかしさを堪こえながら、わずかに首を縦に振る。顔を見なくても、何故か遠田が笑ったのがわ

かった。

「では、もう一度」

顎あごが持ち上げられ、吐息の触れる距離で見上げた遠田は、やはり笑っていた。

その瞳には渴望かぼうと熱情——そして男の欲が煌きらめいている。

「キスをするときは目を閉じて」

唇が重なる間際に、遠田がそう囁く。咲子は言われるままに瞼まぶたを閉じた。

唇が触れ合う。予告されていた分、今度は心構えができた。だが、視界を閉ざしたことで、咲子の感覚はさらに鋭とくなっていた。

——頭がおかしくなりそう。

柔らかなものに口の中が満たされる。傍若無人ぼうじやくびんじんに咲子の中で蠢うごくそれが、一つ一つ丁寧に咲子の快感を掘り起こしていく。

口の中にこんなにも色々な感覚があったのかと驚かされる。慣れた男の手管てくだに、咲子はただ翻弄ほんろうされた。

何度も唇を重ね、咲子も不器用に遠田の舌にこ応える。そこで、不意に体のバランスを崩された。

「あ！ やあ！」

ふわっと足元が頼りなくなっと思った瞬間、ソファの上に押し倒されていた。覆おい被おさつてきた遠田の顔が、逆光でよく見えない。けれど、その瞳が真っ直ぐに咲子を射抜やいていることだけはわかった。咲子は縫ぬい止められたように動けなくなる。